新「共通特論Ⅱ」：臨床腫瘍学各論

高齢者を含む大腸がんに対する個別化治療

講義日：2022 年 10 月 29 日（土）

講師：佐藤　太郎（大阪大学）

要旨

大腸癌における薬剤は日本において開発されてきた。Key Drug となる、Oxaliplatin、イリノテカン、カペシタビン、S-１，TAS-102 は日本で開発されている。イリノテカンの骨髄抑制の予測に UGT1A1 多型を調べ、毒性の予測をすることが可能である。一次治療に用いられる分子標的薬は RA、BRAF, MSI によって使い分けがされる。変異型では EGFR 抗体の効果が少なく、RAS 野生型では腫瘍占拠部位も考慮にいれる。RAS 野生型右側には Bevacizumab、左側には抗 EGFR 抗体が推奨される。しかしながら長期生存する患者が増えているだけに、患者希望を取り入れることも大切である。BRAF 遺伝子変異例は、数%であるが、予後不良であるが、ビニメチニブ、エンコラフェニブとセツキシマブの併用が承認されている。MSI-H に免疫チェックポイント阻害薬の高い効果が認められる。補助療法の適切期間は low risk には 3 ヶ月とされる。高齢者では毒性の問題があり、適応を慎重に判断する。また、ガイドラインにも Shared Decision making が記載されるようになった。